

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 19 日現在

機関番号：34312

研究種目：基盤研究 C

研究期間：2010～2012

課題番号：22520653

 研究課題名（和文） 東西文化を架橋するロバート・モリソンの翻訳活動
 に関する書誌学的研究

 研究課題名（英文） Bibliographic research on Robert Morrison's translation
 activities which bridged Eastern and Western culture

研究代表者

朱 鳳 (ZHU FENG)

京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：00388068

研究成果の概要（和文）：本研究は3年の研究期間において、主にロンドン大学 SOAS 校及び大英図書館に所蔵している、最初に来華したプロテスタント宣教師ロバート・モリソンの書簡と日誌の調査と整理を行ったものである。これらの原典資料を通して、彼の英華字典編集と聖書翻訳活動における中国語観、翻訳観を明らかにすることができた。また彼の日誌と書簡の研究によって彼の東西文化交流における役割を見出すことができた。今日の日中両言語における訳語の共有は、19世紀初頭のモリソンの翻訳活動に影響される部分が多いことも文献資料調査によって確認された。

研究成果の概要（英文）：It has taken me three years to research and transcribe the journals and letters to the London Missionary Society of Robert Morrison, who is the first Protestant Missionary to China. Most of the documents are in the possession of the School of Oriental and African Studies (SOAS), University of London, and the British Library. My study of these documents has clarified Morrison's views on Chinese study and translation when he edited his *Chinese and English Dictionary* and translated his *Chinese Bible*. Moreover, his important roles in bridging Eastern and Western culture have been spelled out. It has been confirmed by this research that many of Morrison's Chinese translations of English terms are the base for the Japanese translation of the same terms. In other words, the Chinese characters for these terms are the same in both Chinese and Japanese.

交付決定額。

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：文化交流史、翻訳史、語彙史、言語翻訳

1. 研究開始当初の背景

近年モリソンに関する研究成果が多数発表されているが、モリソンの書簡と日誌などの原典資料を利用した研究は少ない。結局各

研究に使用されている資料が限定されているため、研究成果も類似しているところが多い。

本研究はモリソンの書簡、日誌などの原典

資料に着目し、その整理と翻字作業を行うことが研究動機である。

2. 研究の目的

本研究はモリソンの未刊行の日誌や書簡などの原典資料についてその所蔵実態を調査した上で、モリソン研究の資料的な基盤整備を目的とする。さらにモリソンの翻訳活動の歴史的な背景、彼の翻訳観と中国語観の形成に影響を与えた諸要因を調査し、東西文化交流におけるモリソンの貢献について総合的にとらえることを目的とする。

3. 研究の方法

主にロンドン大学と大英図書館に所蔵するモリソンの日誌、書簡の調査を行い、モリソンの翻訳活動に関する全体像を原典資料の視点から研究、解明する。

方法としては、まず現地の研究協力者の協力のもとでモリソンの翻訳活動に関連する日誌、書簡を閲覧し、必要な資料をコピーした上、時系列の順でこれらの資料を整理、翻字する。またこれらの資料に基づいて捉えたモリソンの翻訳活動の全体像および近代西洋文明受容におけるモリソンの役割などの研究成果を学会発表や、学会誌の論文発表、ホームページ公開などを通して、社会へ発信していく。

4. 研究成果

(1) 先ずロンドン大学と大英図書館に所蔵するモリソン書簡、日誌などの関連資料の写真撮影と整理を行うことができた。おそらくこのような撮影は初の試みだと考えられる。3年の研究期間で撮影したモリソン関連の原典資料は次のような内容である。

① モリソンの個人書簡

これらの書簡にはモリソンが友人に宛てた手紙、東インド会社に勤めていたモリソンの関連資料などが多く含まれているので、モリソンの人物像を捉えるための基本資料になる。

② モリソンのロンドン伝道会への書簡

これらはモリソンが中国に行く前の1804年から彼が中国で亡くなった1834年まで30年間のロンドン伝道会の本部への手紙である。これらの資料には彼の中国での聖書翻訳、字典編纂、東インド会社での翻訳業務及び中国語学習に関する詳細な記録が残っているため、モリソンの翻訳活動を研究するに当たって、もっとも重要な資料である。

③ モリソンの日誌

これはモリソンのロンドン伝道会への報告記録である。中国での宣教活動、中国での日常生活などを詳細に記録している。これらの資料はモリソンの翻訳観の形成や、翻訳の背景など彼の翻訳活動の真相を垣間見ることができる重要な資料である。

④ 商館記録 (Factory Records)

これは東インド会社本部と中国駐在事務

所(商館)との間の通信記録である。この中にはモリソン字典の印刷への支援に関する経緯や、かかった費用などに関する具体的な記録もあった。モリソンの翻訳活動研究の客観的な資料になる。

⑤ 中国記録 (China Records)

これは主に東インド会社の中国駐在事務所(商館)の中国業務に関する記録である。中にはモリソンの商館での翻訳業務に関する記録もある。モリソン自身の記録(上記のモリソンのロンドン伝道会への書簡)と合わせて、モリソンの東インド会社での翻訳活動を研究するに欠かせない資料である。

(2) また、撮影したモリソンの未公開の原典資料の紙質は200年前のもので、破損が多い上、すべて手書きで、読み取りにくいものが多い。研究協力者とともに撮影した写真を年代別に1枚1枚確認しながら、翻字作業を行った。その結果、ロンドン大学と大英図書館に所蔵するモリソン書簡、日誌などの関連資料の一部の翻字作業を完了した。完了した翻字内容は次の通りである。

① Morrison Journal Box1 South China 1808 January-February

② Morrison Journal Box1 South China 1808 April-November

③ Morrison Journal Box1 South China 1813-1814 January-July

④ Morrison Letter 1808-1811

今後これらの資料を出版することによって東西文化交流、特に東西言語接触史に携わる研究者に貴重な資料を提供できると考えられる。

(3) さらに、これらの原典資料に基づいて、モリソンの中国語観、翻訳観及び訳語についての研究論文も多数執筆し、学会や一般市民対象の講演会で発表し、研究成果を一般社会へ発信することができたと考えられる。

モリソン資料の整理と研究によって得た具体的な研究成果は次の通りである。

(4) 日誌からモリソンの中国での日常活動の詳細を読み取ることができた。これらの記録から、モリソンの中国での文化活動の全体像をとらえられたと考えられる。モリソン研究に関して、新たな資料提供が出来たと考えられる。

モリソンの中国での文化活動の全体像は次のようなものとしてあげられる。

① 19世紀の清政府が外国人の中国での行動をかなり制限した中で、モリソンは精力的に多くの中国人と交流を行っていた。商人、や童僕、和尚の他、町でであった老人、物乞い、科挙試験を受けるために広東に来た知識

人たちなどの人たちと積極的に会話をしてきた。このような幅広い交流を通して、彼は中国文化に関して大量の知識を蓄積することができた。「華英・英華字典」に編集された中国文化に関する諸情報の一部はこのような交流から得たものに違いない。

② 中国街に店を構えていた中国商人や童僕たちは英語学習に意欲を示していた。その目的はもちろん外国人からより多くの儲けを得ようという考えにあるが、にもかかわらずモリソンはこれを中国人と交流するチャンスとして捉えていた。彼は熱心に中国人に英語を教えていた。特に子どもたちに英語を教え、将来のキリスト教伝播につなげようと目論んでいた。そのために、伝道会に「アルファベットが書かれている教科書と手写体の見本を数部送るように」との依頼をし、英語教科書を取りよせようとした。

③ 今までの研究では、モリソンの中国人への英語教育は1818年の英華書院設立以降だと考えられていたが、今回の研究結果で、それを修正しなければならない。モリソンは中国上陸した1807年からすでに本格的な英語教育を行おうとしていたことが今回の資料調査で明らかになった。

④ モリソンはイギリスから中国語で書かれた『四史攷篇』と中国-ラテン語字典を荷物に忍ばせた以外に、西洋の科学技術を代表する最新の機器も持ち込んで、中国人にその成果をいち早く伝えていた。

(5) 書簡研究を通して、モリソンの中国域外の宣教師との交流、聖書翻訳活動などの詳細を明らかにした。

①モリソンはインド在住の宣教師マーシュマン(Joshua Marshman)との間で、中国学習や翻訳方法についての交流があった。モリソンは中国にいながら、聖書翻訳と中国語文法書の印刷は常にマーシュマンより一歩遅れていた。これに対して、モリソンの心情は穏やかではなかったことを彼の書簡から読み取ることができた。一方、マーシュマンも常にモリソンを意識しながら、中国語翻訳と中国語学習を進んでいた。彼はモリソンに中国語学習の支援を頼らざるを得なかった。モリソンは中国から、インドへ書物、紙を送ることもあった。さらに中国語教師を派遣した記述があった。

②1811年のモリソン書簡の中に、「中国語に翻訳される聖書或いは宗教関連出版物に使用するすべての人名と固有名詞の漢字を統一するために、私は『聖書固有名詞字書』を編集した。もちろんこれは写本においても同じである」との記述があった。本研究はモリソンの漢訳聖書『神天聖書』とマーシュマンの『聖經』にある固有名詞の音訳語の比較研究を行い、モリソンはその記述通り、漢字

の統一を実行したことを明らかにした。

(6) モリソン『華英字典』「五車韻府」の新たな版本に関する研究成果。

『華英字典』の版本研究には宮田(2010)があり、日本国内に所蔵される版本について詳細な記述があり有用である。しかしこれですべての版本が明らかになったわけではない。

いままで記述されていない版本として、新たな「五車韻府」は研究分担者千葉謙悟が架蔵している。これは体裁だけではなく本文の異同についてもこれまでに知られていなかった特徴を有しており、「五車韻府」の版本の複雑性を示すものと言える。

近年は西洋資料の発掘が進み毎年新資料の発見が各地から報告されている。これらはむしろ喜ばしい情報であるが、それらの来歴や系統関係・影響関係を整理し、中国語学史研究において信頼に足る資料を選別していくことは重要な基礎作業である。それがひいては西洋資料というものの有用性を高めることにもつながろう。

本研究はモリソン『華英字典』版本整理の第一歩として主要版本の系統関係を整理し、かつ千葉が架蔵の一版本を紹介しその位置づけを試みたものである。モリソン字書研究における新しい発見だと言える。

(7) モリソンの漢訳西書における数詞と量詞の表現についての新たな研究

モリソン以前のカトリックによる漢訳聖書抄訳であるディアスによる『聖經直解』とバセによる『四史攷編』の2書はいずれも文言体である。数量表現で使用されている語彙を指標としてこの2書の文体を調査すると、まず数詞においては、「二」を表現する場合に両者ともに「兩」を使用する文章は少なく、ほとんどが「二」を使用しており、文言的な文体の傾向を見て取れる。しかし19世紀のプロテスタント宣教師であるモリソンの『神天聖書』では、同じく「二」を表現する場合において、白話的な語彙である「兩」の使用頻度が文言的な「二」を上回っている。また、数詞の「兩」とともに、白話的な文体の特徴の一つである量詞の使用も、「個」をはじめとして複数の語彙が極端に増えていることを本研究では明らかにした。なお、『神天聖書』には文言体の特徴とも言える虚詞と文末助詞が多数使用されていることから、『神天聖書』の文体は総体的には文言体を用いた翻訳と言えるが、一方で、数詞の使用状況が「二」に比して「兩」がかなり優勢であり、また、量詞についても上述のように大量に使用されていることなどを考慮すると、『神天聖書』の文体は一定程度以上の白話文的な要素も帯びた「文白混淆体」とであると特徴づけ

ることが出来ると言える。

(8) モリソン漢訳西書の文体についての研究成果

プロテスタントの来華宣教師の嚆矢であるロバート・モリソンは聖書全文を初めて中国語に全訳した人物の一人としても知られる。ところで、モリソンによる漢訳聖書である『神天聖書』の文体は一般的に、西洋人キリスト教宣教師自身による中国語訳聖書の文体カテゴリである「文理、浅文理、官話、方言」のうち、極めて文言的要素の強い文体である「文理 (Wenli 或は High Wenli)」に分類されると言われている。しかし、『神天聖書』の翻訳者であるモリソン自身は、聖書の中国語訳に従事するにあたり、一貫して「聖書の翻訳は原文の文体を重要視すべき」との考えを持っていたのと同時に、「聖書翻訳においては『三国演義』のような文体が最適だ」との考えも併せ持っていた。本研究では、『神天聖書』の四福音書「マタイ」「マルコ」「ルカ」「ヨハネ」の全本文を調査・考察の範囲として、『神天聖書』以前の漢訳聖書抄訳、つまりカトリックによる『聖經直解』『四史攷編』、さらにモリソン以降の後継漢訳であるモリソン・ジュニア (モリソンの息子) によるモリソン改訳、そしてさらにその後継であるブリッジマン、カルバートソンによる翻訳を比較しながら、『神天聖書』の虚詞の使用状況と上述の各聖書 (抄訳) 間の継承関係を考察したものである。考察の結果、カトリックによる文言体による翻訳を経て、『神天聖書』は一定程度以上の白話文的な要素も帯びた「文白混淆体」と言われる文体によって翻訳されるようになったが、『神天聖書』以降の後継漢訳聖書は、伝統的な中国語の文言体に回帰したことを明確に指摘することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- (1) 千葉謙悟、モリソン『華英字典』「五車韻府」の新たな版本について、東アジアにおける中国地域と日本、査読有、2013
- (2) 塩山正純、初期中国語訳聖書における数詞と量詞の表現に関する一考察、『文明 21』愛知大学国際コミュニケーション学会、査読無、29号、2012、107-128
- (3) 朱鳳、モリソン日誌を通して見る東西文化交流、中国語研究、査読有、54号、2012、87-103

[学会発表] (計 5 件)

(1) 朱鳳、新教傳教士の譯詞和漢語觀-以馬禮遜為中心-、香港中文大學中國文化研究所翻譯研究中心、2013年05月31日、香港中文大學

(2) 塩山正純、馬禮遜漢訳聖經的文体、香港中文大學中國文化研究所翻譯研究中心、2013年05月31日、香港中文大學

(3) 朱鳳、モリソンの書簡についての研究-Joshua Marshman との確執-、漢字文化圏近代語研究会、2013年03月23日、韓国 高麗大學

(4) 朱鳳、モリソンの中国語学習に関わった中国人たち-モリソン日誌を資料として-、近代東西言語文化接触会 国際シンポジウム「近代東アジアにおける言語接触」、2012年3月17日、中国浙江財経學院

(5) 朱鳳、19世紀の広東と西洋文化 -モリソンら西洋人は何をもたらしたか-、京都ノートルダム女子大学人間文化学科・大学院人間文化研究科人間文化専攻共催 第七回公開講演会「比較古都論~町のなりたち、人の往来」、2010年11月13日、京都ノートルダム女子大学ガイスラーホール

[図書] (計 1 件)

(1) 朱鳳、京都ノートルダム女子大学人間文化学部人間文化学科「文化の航跡」刊行会、「文化の航跡」ブックレット 4 日中近代語彙変遷における宣教師出版活動の影響、2011、36

[その他]

ホームページ等

<http://www.notredame.ac.jp/ningen/study.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

朱 鳳 (ZHU FENG)

京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：00388068

(2) 研究分担者

塩山正純 (SHIOYAMA MASAZUMI)

愛知大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：10329592

千葉謙悟 (CHIBA KENGO)

中央大学・経済学部・准教授

研究者番号：70386564

(3) 連携研究者

()

研究者番号：